

市民公開講座

身近な 衛生動物との 上手な つきあい方

4月16日 日

13:30~15:30



長崎大学医学部（長崎市坂本1-12-4）

良順会館2F ボードインホール

（医学部正門入って右手）

入場無料（対象：中学生～一般）

ダニ、ゴキブリ、蚊など、さまざまな衛生上の問題や健康被害をもたらす迷惑な虫や動物たちを衛生動物と呼びます。私たちに身近な衛生動物にはどんな対策が有効でしょうか？ 4名の専門家からお話しいただきます。講演内容は中学生以上を想定していますが、小学生の入場も可能です。事前申込み不要です。お気軽にご参加ください。

ダニのはなし 角田隆（長崎大学）

ゴキブリのはなし 杉浦正昭（フマキラー株式会社）

身近な蚊の減らし方 砂原俊彦（長崎大学）

上手な殺虫剤の使い方 谷川力（イカリ消毒株式会社）

身近な衛生動物との上手なつきあい方

ダニのはなし 角田隆（長崎大学）

一言でダニと言っても布団や畳にいて鼻炎や喘息の原因となるダニもいれば、土の中にいて落ち葉などの植物の分解を手助けするダニもいます。また、農作物に被害を及ぼすダニもいれば、天敵としてそれらのダニを食べるダニもいます。このように私たちのまわりにはそこかしこにいろいろな種類のダニがいて、人間の側から見て良いダニもいれば悪いダニもいます。

今回は病気の原因になるダニ、特にマダニを中心に俗にいう悪いダニについてお話します。数年前に重症熱性血小板減少症候群(SFTS)というマダニが媒介する病気が国内で問題になりました。このほかにもマダニが媒介する病気として日本にはライム病、日本紅斑熱、野兔病があります。さらに、マダニ以外のダニが媒介する病気としてわが国には昔からツツガムシ病があります。

いくら人間に害をなすと言っても、これらのダニを私たちの生活する環境から完全に排除するのは困難です。ダニを過剰に恐れずに上手に付き合っていくようにダニについて正しい知識を得ていただきたいと思います。

ゴキブリのはなし 杉浦正昭（フマキラー株式会社）

ゴキブリといえば嫌われ者であり、見た目の不快感を与えるだけでなく、体にさまざまな病原菌を付着させてまき散らすという被害をもたらす困った害虫である。一方で、ゴキブリはその生命力の強さから実験動物としても重宝されており、科学の進歩にも貢献している。また、ゴキブリは地球上では人間の大先輩であり、3億年以上前のゴキブリの化石が発見されていることから判るように、太古の昔から地球に存在していた。このため、ゴキブリの仲間の多くは今でも森林に生息しており、動植物の死体を食べて土に返すという重要な役割を演じているだけでなく、さまざまな動物の餌となって生態系を底辺で支えている。とは言うまでも、一部のゴキブリは家に住み着き、人の命を脅かす恐ろしい病原体の運び屋となっているので、駆除の必要がある。

家に住み着いて人に被害を与えるゴキブリとして最も代表的な種類は、日本の本土ではクロゴキブリとチャバネゴキブリである。この中でも、チャバネゴキブリは最も繁殖力が強く、1組の雄雌から産まれる子孫が全て育ったとすると1年後には2万匹にもなる計算である。実際には環境抵抗が働くので、そこまでは増えないが、少しでも生き残っているとすぐに増えてしまうというのがゴキブリ駆除の難しい点である。ゴキブリ駆除を効率よく行うためには、ゴキブリの生態を詳しく知る必要がある。まず重要なのは増やさないということで、ゴキブリの餌となる生ゴミなどは溜め込まないようにしたい。また、殺虫剤を使用する際も、むやみにまき散らすのではなく、ゴキブリの生息場穂をピンポイントで狙うことが必要である。生息場所は暗くて狭くて暖かい隙間が好まれ、ゴキブリの糞が散らばっているもので、慣れれば発見できる。ゴキブリの被害から身を守るため、日頃から家の中を清潔に保ち、効率のよい殺虫剤の使用を心がけたい。

身近な蚊を減らすには 砂原俊彦（長崎大学）

蚊というのはヒトの血を吸ってその後に痒みをもたらすだけでなく、厄介は病気を媒介する困った昆虫です。数年前に東京で突然流行して騒ぎをおこしたデング熱や、南米で大流行してリオ・オリンピックの開催が危ぶまれる原因となったジカ熱は、私たちの身の回りで最も普通に見られる、白と黒の縞模様の蚊、ヒトスジシマカが媒介する病気です。ヒトスジシマカの活動が活発な時期に海外からこれらの病気のウイルスに感染した人が入ってくると、日本国内で流行が起きる可能性があることから、行政もこの蚊を減らすために様々な対策を練っています。しかし行政の出来ることにも限界がありますし、このヒトスジシマカは本当にどこにでもいる蚊なので、市民の皆さんにも自分で身を守るために家のまわりから蚊を減らす努力をしていただきたいと思います。今回の公開講座では、そのためのコツをお話したいと思います。

また、最近では減ってきている日本脳炎という病気もコガタアカイエカという別の種類の蚊が媒介します。この蚊も私たちに身近な蚊の1種ですが、ヒトスジシマカとは性質が大きく異なります。蚊は日本に100種以上いますが、種類によって夜行性のものと昼行性のものがあります。コガタアカイエカは夜行性、ヒトスジシマカは昼行性です。また蚊の幼虫（ボウフラ）の住み場所も、ヒトスジシマカは植木鉢の受け皿や古タイヤ、雨水ますのような小さな水溜まりを好むのに対して、コガタアカイエカは水田のような広い水たまりを好みます。このような種に特有の性質を知った上で、ターゲットにあった効率のいい対策をしていただきたいと思います。

上手な殺虫剤の使い方 谷川力（イカリ消毒株式会社）

害虫を殺す方法として殺虫剤は最も簡便な方法の一つです。しかし、使いすぎると害虫に抵抗性ができて効果が無くなることや、ヒトや有益な虫たちに悪影響が出ることもあります。では殺虫剤の上手な使い方はあるのでしょうか？

まずはじめに殺虫剤を使うにあたり、以下の3つは重要です。

- ・その殺虫剤は何の虫に効果があるかを確かめること。
- ・殺虫剤は使う前に注意書きを必ず読むこと。
- ・用法用量は必ず守り、それ以上の使用は避けること。

しかし、その殺虫剤を使う前に、使わないでも済む方法、もしくはできるだけ少量に済ませる方法を考えることの方が重要です。例えば蚊やゴキブリ対策では発生場所や餌となる食べ物を片付けるだけでも効果があります。つまり整理整頓清掃が必要ということです。また侵入防止対策として蚊では網戸、ゴキブリでは台所の配管まわりの隙間を塞ぎます。そのような対策を環境的な対策と言い、殺虫剤を使う化学的な対策と区別します。これらの2つの対策は併用することが重要です。

さらに、それらの対策を講じる前に調査を重視しましょう。調査はまず害虫種の特定をすることです。例えば蚊であればヒトスジシマカかアカイエカか、ダニであれば室内塵性のダニかネズミやヒトを吸血するイエダニか、ゴキブリであればクロゴキブリかチャバネゴキブリかを調べます。種類によって生態も異なります。その生態を知ることにより発生源や侵入場所などが明確になることもあります。また調査の結果から被害が少なければ殺虫剤は使わないで環境的な対策のみで対応することも可能です。